いらつめ　第廿八九

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

いらつめ第五十八号目次（明治廿三年六月二十日）

●文藝美術……老女杜鵑を聽く（唱歌、文章）

戀山女史＝香䣭舍＝紅顏子＝中京太郎

＝目時絹子＝撫箏女史＝越の舍＝有本

久光＝さつき＝水野秀＝香圃女史＝淸

川八重子＝山本楓里＝藤元あさ＝賤女

＝鐸洲漁夫＝山崎ひで＝三坂きぬ

○静けき流（韻文）………綠梅子

○戀しき君（韻文）…………綠梅子

○花兄弟二枝梅香（續き）…立花家薫

○宇治に遊ぶ記…………笹川はる子

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓○二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢○別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢○並別兩製共前金領收の上で無くてハ差上げぬ事○府內に限り無郵税○毎月二回（五日及二十日）發兌○金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に　神田郵便局と記し受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事○郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれば妨げ無い事○見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます○廣告料一行金八錢、割引無し

從第五十八號至第六十七號十部版權所有

明治廿三年六月十九日印刷　明治廿三年六月二十日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本鄉區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號には**老女**杜鵑を聽くといふ唱歌文章**立花家**氏の花兄弟二枝の梅香

綠梅子の静けき流●**戀しき君**といふ韻文と

笹川はる子の**宇治**に遊ぶ記なども出て居ます

文藝美術

第二十一回懸賞文藝應募得点

題　老女杜鵑を聽く（前号のつゞき）

○唱歌

よ　（イ）

夜はふけわたり雨しげく、　月も沈みて空くろし。
雨ふる夜さり啼くとれゞ。　あゝれつぞや我夫と
共にその夜とまちくくて　きゝしむのしそはかなくも、
今そむなしき老の身と　かそりたり共はと丶ぎそ、
啼くあゑのこはかそるまじ。　すそや！今きくわれ聲ハ……
あそれ！うれしや！もとのまゝ。　されとかそりし昔の下、
とゞのつまいかに聞きあけむ。

櫟山女史（キヤウト）

つき　（ロ）

月さしのそく窓下に　老女れ空を打まもる
折しもあける時鳥　雲間に姿は見え失せぬ
流れもけ浮けるくも

香翹舎（ナニハ）

（ハ）

われとはなしに　字の花よ　鳴くやと丶ぎす　きけよかし。
汝冥土の　鳥とかや。さらば問はあん　我つまは

紅顔子（ウスイ）

三十歳前よ　世を去りぬ。その音つれを　知るあらバ
くはしく語れ　我れ聞かむ。とはいふもの丶　いかよせん
ものいふとの　出來ぬ身は　よしや安否を　知るとても
語るすべとて　あらざらむ。されど彼の世の　鳥なれバ
もしや彼の世よ　歸りあそ　もの言ふとも　出來ぬべし。
さあらバつまに　言づてよ。
君にわかれし　其後は　世を味氣あく　はかなさて
花さく春は　來れども、　我が身れ上にそ　花もなく、
若葉さし添ふ　夏來れど、　ふりゆく身よは　かひぞあれ。
紅葉染先あす　秋來れど、　我身はひとり　色もあく
泣きつ丶暮らす　其中に、　何時しか過ぎ　三十年の
月日かさねて　頭にそ　雪をいだゞく　身となりぬ
あはれ明日とも　知らぬ火の　西の海にも　こぎ出でゞ
パラダイスにて　諸共よ　手と携へて　天帝の
めぐみにあそん　日をまつそ。

以上三曲無賞

（ニ）

その一聲を聞くにつけ　想ひいだすそゝおのごのとの
うぶごゑたてし時ありれ。　あゝいたわしや汝のすぎし

中、京太郎（イセ）

あとゝはかなくたちまちよ　つもるをぐしのしらいとを
いつしかとりて六十一路。　あはやこの世になからへぬ。
もろれ命とあれらめて。　いまぞ不如歸とたうらかな。
もとれしみちのイーヅンに、　をゝしくたけくうたはんう。

目時絹子（イヘキ）

（ホ）

日増月まし世の中の　そゝむよつけて風ぞくも、
また物いひもと國の　それとのむと學びつゝ、
げよく廣くひらけ行　よに有なからなよ事も、
おくれかちにぞ日を送る　おくゐのみこそ悲しけれ。
ことしの春もやゝすぎて、　花れ盛りのおもかげの
うそり果たる夏木立、　若葉さしそふ茂みより
一聲もらすはゝとぎず　むかしのまゝよきなもなり。
おくなの友によれ友れ　れゝ時鳥はとゝぎす。

以上二曲いらつめ一部　撫箏女史（ミノ）

（ト）

いとゞさみしき老の身の　ねあへぬ夜半にさつきあ先
ふるきことを思へとや　あそれよさけぶはとゝぎす。

總の舍（トウケイ）

（チ）

人生五十夢と過ぎ、　今年の春もまた暮れて、
夏山ふかく綠しつ、　翡翠れ簾かげすゞし。
涼しれ夜半の月代に、　さやかに名のる不如歸。
称さめて聞けぞ老の身の、　すぎ越方ぞ忍ばるゝ。
紅顔すでにうつろいて、　綠髮とゝよまばらなる、
老曾の杜れ女郎花、　心なやむる色香なし。
色香なくとも我庭れ、　錦織り出すなでしこの、
いやなつかしき面顔を、　とく見ん日こそ戀しけれ。

以上二曲第三等賞　有本久光（イヘキ）

（リ）

青葉がくれに咲れ殘り、　憂をあつめし姥ざくら
さらでもゝろきいろなるに　山郭公血に泣きて
花れ唇色動く　姿れ見ゆるあはれさよ。

評　最後の「姿云云」を删り取れば最も妙。

（ヌ）　さつき（イヘシロ）

とぎすましたる月の鎌、　五月雨空をれりひらき
一聲もらすはとゝぎす　今一聲の初音をと
顧ひたりしはや昔し、　思ひ起せば辰のとし、
八千八聲時も時　東叡山の山のおく、
死出の旅路よ促がされ、　夫も我子も消え失せて、

かたみとなりし娘子を　せめてはとて育てつゝ、
藝に身よするあぢきなさ　わづか許りの便りえて
旅にはあれねみちのおく、　文教へしも誰が爲めぞ。
六十路を越えし身ながらに、　ちかひしとて氷の泡、
後れて來たるほとゝぎす　西は空へと誘ひもて、
去りにし年もはや六とせ、　待ちもせざるに二ッ三ッ、
又も誘ふの告ぐるなり。

以上二曲第二等賞

○文章

（イ）　氷野秀（オホサカ）

思の淵は深けれど淚に沈む時ぞなし——最と可愛吾初孫は書物脊負ふて遠き巴里に遊びしより指折りこれば早や六歲學の藝も進みしならん思ふ業をもなし卒へて博士の号を苞にし名譽は船に打ち乘りて歸り來るも苦るしき夏の過ぎ去つて來る涼しき秋を樂しと思ふは晝と夜—思ひ深ければこそ此の短か夜も長きにぞあらん……燈火影暗らく四方靜にして僅に漏れ響くのみ——眠るともなくうつくゝと萬里の旅に遊び懷かしと人と相抱きて其慈なきを喜び——起て窓を開けば半月西山に入らんとして新林の夜風綠葉を鳴らすのみ——往時旅寐の極山に一聲は杜鵑數限りなき嘆を起し量りなき淚を灑ぎしが——時と所は換れ〻とて巴里の里にも雲間を横ぎり月に叫ぶ鳥なからずや？　歸に如かずと鳴く聲聞かば腸を斷ち故鄕を望み淚を流すこともあらん？　ああ夫に死別れ子に先たれし不幸！　されど長命せしは無二の幸！　無双の喜！　杖とも賴む獨り力之助歸り來りて祖孫相語るとき、これぞパラダイスに在るの思ひやせん……六年の淵より深き心遣ひ喜び樂む瀨とあらん——吹くな風たつな波名譽の船の歸り來るまで。

（ロ）　香圃女史（イガ）

あゝ荒れさびた竹の生垣、破れ果てた雨戸、其のすきまから、もるゝ薄暗き燈火ボンヤリ。　其の生垣に眞白く——時ならぬ雪の如く——見ゆるは月にさらす卯の花折々吹き來る風に連れてプント香るゝ庭面に咲ける花たちばな。

時刻は丁度午前四時頃です。　輝いた月も最早や西の山の端に影を朧にして、忽ちに雨戸を開けて—厠へでも行くのか—顏を出したは多分此白屋の主人でしやう。　年頃五十前後の老女髮は切下にして後に垂れ、寐衣の姿でそ。　が、其品の好いこと、今こそこんなあばら屋に住んで居るものゝ何

れ昔は片書の有る人の妻でしたらうよ。

雨戸に兩の手を掛けて老女は其れとなく、空をながめました—發矢——其れと同時美妙な優しい一聲を殘して、とび去つたは雲間過行く山ほとゝぎす……老女は此の聲を聞いて徐ろに昔の事を戀しく思ひましたが暫らく杜鵑の鳴いた方をながめて居ましたが軈て思ひも知らず獨言——昔覺へた琴の歌——

「若い時分にお屋敷で琴の會の有つた時……ア、そう〳〵彼の時は私が奥組の新雲井弄齊を彈じたつけ、最う皆忘れたが初の一歌……何とか云つたつけ、何でも丁度今の樣な景……」

少し考えて

「ヲ、そう〳〵
月もろ共に杜鵑鳴きて入るさの山の端見れば早や短か夜も明け渡る……」

清川八重子（トウケイ）

そら（へ）

空も一面に薄ずみを流したやうに物凄く時々シヨボ〳〵と降るふらずみ定めなき此頃の模樣いつ晴るだろふと思たのに今宵は風の故か雲も吹き流されて嬉しそふに靜かな下界をのぞむ新月の美くしさ美人の素顔それ處ではありますまい其優美な床しき姿はとても拙き筆には寫せません此可愛らしいあどけない處女の樣な新月の笑顔に向ては下界の露にぬれそぼれた梢の若葉も連日の不平は忘れたでしやうむしろ是の雨に飾てくれし露の玉が今宵は黄金に化したのをよろこんで居るらしいですハッシ一陣の風情けなき黒雲は可憐の姿を覆ひかくしましたそれと同時一聲音つれし時鳥ア、心なき身にもこゝろにあはれを催す今宵の景此もの凄き夜にアラ不思議戀ひにこわさも忘れた少女テモ急ぐとも見えません空を仰いで何やらしきりに嘆息する有樣ハテ——見れバ早や頭には霜といたゞいた老女今の杜鵑を聞て懷舊の情を抑へる事が出きなく遂足にまかせて此景色をながめて居るのです……世にかなしき事の數ある中にも我が最愛の子に先立たれし程……ヨモ是に越した悲しい事はありますまいア、此老女世の不幸をなつめし老女……夫に別れて十とせこのかた只た一人の娘なき人の忘れ形身それを杖ともはしらともむしろ命の綱とも賴んだ娘ソノ娘が去年の今宵病の床にありながら杜鵑の初音を聞て詠じた歌其時は心付かなかつた歌後でよく見れバ……ア、辭世であつたとそれは娘が死ぬ一週間前の夜……其時

は一聲は娘をアノ世へ導くのであつたのよ……何の樂もなき
うき世にいつまでながらへて居るよりはあろふ事なら我身も
早く娘のそばに……ア、それにしても去年は今宵は娘の此世
になつたれよ……此老女の心でーどんなでしやう實に定めな
きうき世老少不定とはよく言た言葉です

以上三章いらつめ一部

（ニ）　山本楓里（メン）

方一町もあらんと思はるゝ屋敷—礎へ依然となるなれば堀出されたるなり。　彼方に高き松の一ト本、此方に殘る雪隱、藏の跡高く、千草茂りて蛇は王國。　坐敷は跡窪み、水溜りて蛙の領地。　此處に雨露に晒らされつゝ殘る壁の骨、彼處に倒れもやらず僅に影を留むる筋壁の塀、片戸のみ傾むく門より奥へ五間許り其處に、一棟これすら屋根黒み、樑傾き、柱虫ばみ、板瘠せたり。　かくても猶棄難きか、浮世の面影、戸隙漏る火影、さては人。　おく霜とまがふ髮、つやゝかに結び昔床しき女性、苧をうむ手元妙へなり。　傍へなる七才許りは小兒は罪無き笑顔、つくづくながめ、ねかりたり卯月の空とはいひながら、假寢さしては風をや引かん。　夜のものとらせん、と立たんとせる折しも、耳を貫く一ト聲

―不如歸去―障子開き眺むれば昔に變らぬ月ばかり。　物足らぬ心知すれど、事問ふんやうはなし。　あゝ吐息に續ゐて出づる述懐、あゝ浮世！　時鳥聞かばやと山寺に待ち詫びしも昔し。今も居ながら聞くつらさ。　庭の古雅ならぬを吐きしは昔し。今もおのづと香に染む苔を見るかなしさ。月よ、花よ、姨捨や石山へ、御室や吉野へ――ア、昔！

又貫く一ト聲――不如歸去。歸去せんにも生れしは此の伏屋、たよりに思ふ此兒――我孫！　我子の忘れ紀念！四人の愛情のつながる此兒――死なれし我夫、戰死せし我子、時疫に犯されし嫁御――せめて、もう十才計り大きうして、あの世で三人りの笑顔を見ん。　たより少くなの此兒、たよりとするは此老の身、住馴れし古里に居ながら他郷暮はしき我心――ア、今！

又近く貫く一ト聲――不如歸去――唐士人は都にて聞き、世の衰微をかこちしも實に……變る浮世……旋る運。

（ホ）　藤元あさ（ロサカ）

一面に立込めてゐた霧、夜のしんしんと更け行に伴れていつか其朦朧の姿も嵐氣に消され、殘る露は月昇る木の間の若葉に閃いて、見渡す限りは清涼一氣。　此清涼一氣の中に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

設けた一個の茅廬、それ中に坐するハ年長けた女、盲はずとも……何かゆかりのある人。折しも吹きおろす嶺の颪、遙に杜鵑の聲を送つて、灯の影青く瞬いてゐる窓の下に不如歸！不如歸！

「ほんに月日は早いもの。今年で最早三十年、忘れもせぬが、あの方と二人伊勢參宮を思ひ立つて、穿き馴れぬ鞋はれしめ、道中もやう〳〵五日目に着したのは高杉の驛！驛の姫松屋で一泊したのハ恰度今時分、二階の障子を開け放つて酒くみかはしてゐた時に聞いたのもあの杜鵑の聲！『妙だ』、怨恨千年猶未盡、依然啼血夜山雲……皆々よう覺えてはゐぬが、此詩とお作りあすつて、妾に十七文字でも何でもいゝからとれお勸め。とう〳〵笑つて一夜を明した其時の樂しさ、それが今の悲しい種。間もなくあの方……おゝ思ふも何だか胸が……文久三年の春の晩、天忠組の一人にお加はりあそつて、五條村の夜討、天の川辻の不意うち、其年の八月廿八日、つひに無慘な御最悟——生き殘つてゐる妾も今は皆此樣になつて仕舞つて……あゝあの杜鵑の聲、昔しながらの聲、それに妾……浮世とて兼てより知つてゐるものを………

以上二章第三等賞

（へ）　　賤女（イ二）

時鳥いたくな鳴ぞひとり居てとよまれしときくたとへの人も今の吾身とおなじ心よやありけん。今はあの一聲も嬉しと聞し人もあらん。　妾は時鳥てふ名をきゝ聞ても時あらぬひらさめにぬるゝ袖。　かぞふれば三十年前まだしのび音の卯月のはじめ、頼み少なき病の床にふし居玉ひし折しもかすけく外山にもらせし初聲を聞しめして、「時鳥道しるべせよ死出の山」。とよませ玉ひて葉末の露ともろともにはかなくなり玉ひし吾夫おもひ出るも涙のたね。　愛で玉ひしたちばないたく老ても年毎に花を開きてかぐはしき香を匂ふをきればいとゞなほすぎにし方のしのばるゝ。　いとせめてかしの實の一人にても子といふものあらんには心なぐさむよすがもあるべきにとすぎし昔を思ひ出でそゞろに涙にむせぶ折しも雲間に又一聲、天邊闕乎。

（ト）　　鐸洲漁夫（オホサカ）

頃は丁度卯の花月、花の匂も最といとしふ覺つゝ草茂る嵯峨野の奥へ只一人涼しく薫る苔の細道踏分けて昔談りの友を尋ね侍りし。　折しも夕空の茜もさえて梅月の冴やけく卯

の花に照り渡る様、唐し王子猷の月に掉さし戴安道を訪ひし月夜も思はれて最と面白かりし。 心細くも若葉にかをる片扉、花橘の薫りさへ過し昔の忍ばれて常盤の木々の落葉して埋る庵の物淋しさ。 窓打つ雨の水音か、萩結ぶ夜の風。叩く水鶏は其外はたえて訪ふ人有べう思はれず。 主の比丘尼は賓の子の上に歌膝は儘月眺めつゝ居しが、妾の訪ふを聞き、野中は清水心知る古へは友のもてなし最と嬉しかりし。老は常とて涙もろく面白かりし事とも咲そに付ても涙出で、越し方忍び、しめやかに蓬のもとの露ならねど、泡に消込む心地せられ、葵衣の昔を思ひ、互に更け行く月の無常を語る中雲のをち方洩て啼く匂ひは一聲不如歸。

以上二章第二等賞

（十）

山崎ひで（トウケイ）

どうでげす、老嫗さん、今日こそはとゝぎす鳴所を取違へたと見えますな」。

「え」。

「なにさ、なりわけは月に鳴くなるほとゝぎす今日こそちり行く花の上かな。 だから……げしやう」。 心は中で独言

「まだ分らないと見える、 はゝゝゝ馬鹿の事を謂ているドレ歸るとしよう。 ばあさんお先へ。 まだお歸りでないかえ」。

「あゝ」。

返答をきかぬ中にはや門口を出る。

「夜通し強られてあゝ酔た〳〵」。

あと見送つて「若いものは相かはらずだ。 人もやとゝぎすをきいて考へて居るに」。

（十一）

三坂きぬ（イツミ）

散り残る櫻は烟微かゝ尚其色をほのめかし、崖に差出た茂りあへる若木は葉よ月を漉して流れよくたく碧幾すぢ。

山荘の今日此頃！ 夜は衾を侵す嵐氣に時有ッて夢覺め、目冴えて、一杯の冷茶更にあたゝかく語り合ふも嬉し。

「さうだねェ、入浴の験の此頃こそ大層肉づいて來たぢやあいか。 主人も……さうさ——蕨を採りに行ッて留守だッた。此處へ來て『奥さまのお顔の艶のよろしうおありあされたこと』なと云ッて居ッたよ」。

「はゝゝ左様で御座いましやう。 今ではすッかり快くなりました様でございます」。

「もう二三週間も居るかね〻——大事な身躰だもの……し

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

かし女連の無いので徒然だらう。一つ小説でも書いて婚禮前后の境遇だの感情だのを寫しふらせうか。随分面白いこともあッたから……」。

「はゝゝあなたこそ……オヤ！　今の一聲は？」

「あれが忍び音のほとゝぎすですね」。

＊　＊　＊　＊

亞字欄の一角、幾夜聞いた不如歸の聲。遂に手を把ッて有馬と歸りしより――あゝ夢の間！　今は早數十年花は落ち水は逝いて共にした人の戀しい影もなし。ふることしのぶ我此思ひ、知るも唯昔に啼く――彼れ？――杜鵑のみでしやう。

以上二章第一等賞

静けき流れ　　綠梅子

静けき流れ、ほれに言へ！　汝がその水のいづくより、
さまで美麗に隱るに、　いづちをさして流れ行く？
わが身のもとは谷かげの　糸にも似たる泉なり。
されど行き着く果は灘、　さわげる浪も墓にして。

戀ひし君　　綠梅子

戀しき　きみの　優しき　眼。
こゝろと　共に　いろ　すゞやかに、
まごゝろ　こめて　わが　顔　見詰む、
からだも　うたゝ　とろくる　計り。
戀しき　きみの　たよけき　聲音。
さながら　天の　樂にも　似たり、
またしも　深く　のたまふ　言葉、
聞く　ごと　胸は　とゞろく　計り。

花兄弟二枝梅香（つゞき）　立花家かをる

本舞臺上へ寄せて中足の二重本緣付折り廻し二重上手床間地袋違棚續いて襖の出這入り奥より椽先きへ流れの心にて浪布を敷き所々樹木飛石など宜しくあつて下手に庭より奥を見せたる書割り上下風雅なる網代塀にて見切り都て武藏樓離座敷の体二重座蒲團の上に前幕の浪花の梅吉火鉢にもたれ考へて居る此の見得靜かある上方唄にて道具止る

吉　小分け香太に話もせずはる〴〵茲に尋ね來て幾度とあ

く口を掛けれど今宇都宮の賣ッ妓とて所々方々に座敷がの多く遂に一度も逢へぬとハよく〳〵縁の無いものか。然し先ッきも呉れ〳〵と茲の内儀に頼んだらどうか都合を見計ひ御逢せ申すと請合つたが未だに顔を見せぬのハ矢ッ張り今日も無駄足か。思ひ廻せば廻す程戀の奴に使ハるゝあゝ身ハ是非もなき物ぢやなア。

トおッと仕打誂の端唄にあり奥より以前の梅吉出で來り宜しくあつてトド梅吉と顔見合せ、

梅　やゝ貴方ハ浪花の梅吉様。

吉　おゝまことに貴孃ハ御孃様尋ねて來る甲斐ありて。

梅　ね。

吉　いやさ何も替らず、

梅　貴方も御無事で思ひ掛ケない此の御見得。

吉　こりや夢でハござりませぬか。

ト二人ハ思ひ掛けぬ仕打にて双方宜しく思入れ合方きつぱりとあり、

梅　昔に替る今の有様賤しい姿で此塲の御目もじ御恥かしう存じます○ト戀の仕打浪花ハ思入あつて

吉　盛衰榮枯ハのがれ得ぬ浮世のならひト云ひながら藝者稼を爲さる迄替り果たる貴孃の境界これにハ深い仔細も有んと乍憚御推察申し升る○ト情けないと云ふ思ひ入にて涙を拭ふ

梅　よく被仰つて下さんました。つらい悲しい難儀ハ數々貴方に御目に掛るにつけ思ひ出せバ胸一杯張り裂くやうに存じます。

吉　御道理でござります。定めて切ない難儀の上斯るしがない三線の勤め御悼ハしう存じまする○兩人ハ戀の仕打梅吉ハ思入有つて氣を替へ

梅　はゝゝ久々にて御目に掛り未だ御挨拶も濟まぬのに自分勝手な身上話御免なされて下さりませ。それハさうと貴方にハ日光の御歸りがけでござりまするか。

吉　いや參詣の戻りではござりませぬ。

梅　左様なら何にか當地に御用事でも、

吉　いや〳〵左様でもござりませぬ。實ハそる〳〵參りましたハ、

梅　あの江戸から御出になりましたハ、

吉　ちと申し兼る儀なれども○ト云ひ惡い仕打宜しくあつてト思切つて、

貴孃の當地に御出とさゝ御あとを慕つて參りました。

梅　なんと被仰る○ト梅吉ハびつくり思入合方替つて浪花ハ汗を拭ふあとなど宜しく有つて、

吉　さゝ其の御不審ハ御もつとも私の心の中是にて御推察被下まし。

ト懐中より序幕の簪と取り出す。

梅　此の簪ハ私の指し料是がどうして貴方の御手に。

吉　去年淺艸觀音にて貴孃の落した此れ簪。

梅　ホンに左樣で厶んした。

吉　夫れと今迄肌身を離さぞ懷中したる一通り。御孃樣御聽きなされて下されまし○ト合方しんみりとあり、かやうなことを申したらさぞ御下げしみも厶りましやうが忘れもやらぬ去年れ二月しかも三日の夕くれに觀世音の境內に泥醉武士を取りひしき貴孃を御助け申しゝ時ふつと身に染む戀風に家に歸れど夢現寐ても覺めても忘られず其のうち餘義ないことと有つて京三界へ旅の空つく宿々に艸枕果敢なく結ぶ夢れ間も仇な姿の影幻驛路の鈴に驚なされ覺れバ殘る此の簪。あゝゝ身分違の御武家と町人とうで協ハぬ戀故とあきらめやうと思へどもあきらめられぬ身の因果貴孃と夫婦になれぬなら一生妻ハ持つまじと無理な誓を心よたて平生好む酒さへも三年斷つて丁度一年刀の中も火の中も人の爲先にハ飛込んで鬼神さへも取り挫ぐ浪花れ梅とか達衆とか人に言ハるゝ私も戀故夜晝心を痛め男の身にて恥かしながら思ひせまつて病の種、

梅　ゑゝ○ト宜しく仕打

吉　さ丁度歸りの道中故箱根の湯場に二月余り保養の上に霜月末江戸へ戻つて樣子を聽けバ如何なる子細の貴孃にハ宇都宮にて藝者の勤め飛び立つ樣に思へども歸り早々用事の多く夫れより年の明るを待ち兼ね直に仕度をとゝのへて小分の者にハ話もせずはる〳〵尋ねて參りましたも一度び貴孃に御目に掛り切ない胸を打ち明けて有無の御返事承り生死を決する所存の程御推察下されませ。

ト思ひ詰めたる仕打思入れにて言ふ梅吉ハ實なき仕打宜しくなつて、

梅　不束なる私に左程迄れ御思召難有涙がこぼれます。

ト泣く。

吉　私とて浮きたることハ望ましからず夫婦ハ人の大禮なればもし御得心さへ下さらば抱の主に話とつけ媒人立てゝ正しき婚儀幾千代掛けて添ひ遂げん世間晴れての宿の妻どうぞ御得心下されまし○ト始終思入にて云ふ○梅吉ハ切なき仕打色々有つてハ、、、、

ト泣き落す涙花ハぢつと仕打有つて、

夫りやどうでも御得心下さり升せぬか。御返事なきハ御不承知のあゝ是非もなき次第で厶る。

ト宜しく仕打梅吉ハ堪へ兼、

梅　梅吉樣どうぞ許して下されませ。

ト袂をそみヱツと泣き伏す此の以前後の襖と細く開き以前れ小芳伺ひ居りよつこり思入なつて襖と閉める

吉　御孃樣御情け無いと申すものそりや身分違の町人故御承知がの有りませぬか。

梅　いや〳〵勿体ない其の御言葉文武の道に秀でしのみか器量

すぐれし貴方様夫に持つハ女子の果報其上ならず色々と身に餘りたる御思召○ト涙を拭ひあとハ言へぬ仕打宜しく有つて、

吉 其の御思召に背きますも言ふに言ハれぬ切ない仔細。

梅 なに仔細と被仰るハ。はゝア言ひ替したる男でも。

吉 いや〳〵なにしよ汚しイ。

梅 そんなら仔細を御明し下され。

吉 梅さア夫れと 吉 さア 梅 さア 吉 さア 梅 さア○ト繰り上げ宜しくあつて、

吉 死るも生るも御身次第御返答ハ如何でムる。

トきつと云ふ梅吉ハ堪らせわつと泣き伏す此時奥より以前の小分○△□◎ドヤ〳〵出で來りコレにて二人ハビツクリ仕打

○ やい〳〵どこの馬の骨か知らねエが此の梅吉と云ふ姉さんハ、

△ 巳の親分が今朝から揚げ詰め、

□ 夫をどうしてこゝへ呼んだ、

◎ 青二才手前ハ盜賊同然だ。

吉 やゝ。

○ いくら面をふくらしても此の言譯ハ、

三人 立つめイがあ○ト四人ハ浪花に掛ると身をかハし左右に押しのけ宜しく仕打梅吉ハ中に入り、

梅 まゝ皆様待つて下さんせ是ハみんな私の夫彼方ハ少しも知らぬことどうぞ量見して下さんせ。

皆々 いイやならねエ。

○ 梅吉姉も言はゞ同罪。

△ 盜賊野郎と、

□ 親分の奥の座敷に、

◎ 引張りゆけハ、

△ ヒたたせきと、

皆々 うしやアがれ○ト四人ハ二人を引立てやうとする奥にて

八 いや來るにハ及ばねエ。

皆々 やゝ親分○ト皆々控へる襖を開けて敷島八重造男達好の拵よて出て來り、

八 こりや梅吉控よ居るハ御前の情夫がはてびく〳〵するよハ及ばねエわ○野良達ぞなんださわ〳〵騒いで見苦しい。

皆々 へエ○ト皆々八重造の後へ控へる○八重造ハ能き所へ住居ひ仕打あつて浪花に向ひ、

八 もし御若者最前から小分の奴等が粗忽お振舞私に免じてゆるして下せい。私ハ野州近邊でハ少しハ人よ知られた敷島八重造ト云ふ武骨漢今日初春の氣晴に平生から贔屓ぶする此の梅吉を揚げ詰先に小分と一所に騒いで居るがこなたハ誰よ断つて此の藝者ハ呼たしやつた。

吉 むゝ○ト返事にこまる思入れ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

八よも言譯ハあるまい○トせゝら笑ふ。浪花ハ少し癪に障る
思入よて、
吉成程こなたれ揚げ詰めと知つて呼んだら惡かろうが此方ハ少
しも知らぬこと、落度ハ更にない筈だ。
八どうしたと。
吉よし又知つて呼んだにせよ野暮ハ嫌ひの茶屋小屋に藝者の
前で兎や角と言立をする親分も隨分似合ぬ不粹者。
八むゝ。
吉呼んだが惡るけりや勝手にしろ。
皆々やゝ。
吉びくともするのぢや有りやしねエ○トきつと思入れ八重造
ハ思入れ有つて、
八あまさま面白い其の言譯まだ廿代の樣なれど膽すわつた
天晴若者してあなたの名前ハなんと仰言る。
吉名乘るもどうやら恥かしーが私や江戸の一文奴浪花の梅吉
と申し升。
これにて皆々顏見合びつくり仕打八重造ハ思入れあつて、
八そんならこなたハ江戸ハ勿論京大坂まで名のひゞく今業平
の梅吉親分○さうきけバ尚のこと江戸の達衆よへこまされ
指を喰へて引込んでハどうも是から小分の手前。
吉そりや此方も同じこと野州の達衆に引と取りすご〱江戸
へ戻つてハ八百八町の徃來も眞晝日中通れぬ梅吉。

八互に其の名ハきゝながら逢ふが別れの。
吉命のやりとり。
八是も前世の約束事。
吉互よ磨く男と男。
八引くに引かれぬ意地と意地
吉八思へバ是非なき○二人ハ顏見合せ宜しく仕打トヾ氣を替へ
て、
吉そんなら敷島。
八梅吉親分。
吉八どりや一勝負○ト二人ハ刀を引きつけ立ち上り、
兩人まようのへ○トきつと見得梅吉ハ二人の中に這入捨臺詞よ
て色々止める二人ハつきのける。此れ立廻りのうち奥よ
り以前の浮浪出で來り直よ二人の中よ這入り、
浪まゝゝ、待つて下さんせ。
吉男同士の立引よ。
八女れ留め立て。
二人退いた〱○ト二人ハ早き鳴物になり梅吉浮浪をつきのけ
〱
刀を拔きつとある。
浪決して留めハ致しませぬが御二人樣に一の御願。
二人なんと。
浪どうぞ控へて○ト二人れ中よとつて坐り、

吉 もし下さんせエなア○トきつと仕打二人ハ心れ内思入よて して〳〵一ッの、
八 願と云ふれ。
涙 私を殺して下さりませ。
吉 やゝ益も無き女の邪魔立て。
八 怪我せぬうちに、
二人 退いた〳〵○ト又烈しく切り結ぶと彼涙ハ色々有つて側に在る羽織にて二人の白刃をしつかと押へ、
涙 もし御二人の手ハかりぬ南無阿彌陀佛○ト帯の間より剃刀を取り出し直に咽に突き立てやうとする二人いびつくり其手を押へる。
いや〳〵どうぞ死なして下さりませ○ト覺悟の仕打
吉 して何故に、
八 自害の覺悟。
涙 さ敷嶋親分れ揚詰の梅吉さんと此御座敷によこしたハ私の差圖涙花の親分の少しも知つたことぢやムんせぬ足らぬ女の猿智惠より男を磨く御二人様よもし御怪我でも有時ハ其の起りハ私故世間の人よ面目なくどうせ一度ハ死ぬ命同じおとなら名にひゞく達衆ハ刀よ掛つたならさぞ成佛を致しましやう。これが責ての身の御詫どうぞ殺して下さりませ。
ト宜しく仕打二人ハ感心れ仕打あつて、
吉 男子も及ばぬ天晴れ心底。
八 敷島甚だ感心致した。
吉 春早々料理屋に血の雨降すもなんとやら、

八 かゝハ内儀の志ざし○親分さへ言分なくば。
涙 そんなら此場ハ此儘よ、
吉八 いかよも内儀にあづけました。
涙 そりや此の私よえエ難有うムりまする○ト皆々悦ぶ八重造梅吉ハ刀をおさめよろしくあつて八重藏ハ平のふたでぐつと飲をほし直に梅吉よさし、
八 目出度き此場の終りよ交際方々親分どうぞ受けて下さいまし。
涙花ハ願酒故困つたといふ思入れ。
八 さア男の差した杯を何故てあたハ受さつしやらぬ○まづ八重造をこけにするか。
吉 あにしよ以て。
八 そんなら受るか。
吉 さア夫れハ、八 さア、吉 さア、八 さア、吉 さア、○ト繰り上げ宜しく涙花ハぐりと困る梅吉ハ思入有つて
梅 其の御杯ハ私が頂戴致し升。
ト杯と受る皆々びつくり仕打梅吉ハお涙に向ひ、
御神さんなみ〳〵ついて下さんせ○お涙ハ酌とするをぐつと飲みほし八重藏にさし、
もし親分さん私の代とつとめました。
八 平生からして好まぬ酒を○ト宜しく仕打小分ハ胸悪き思入れにて、
四人 もう此上ハ○ト刀を拔き掛けるを涙花ハきつと留める梅吉ハ八重造お杯を差しつけきつと思入れ此模様宜しく端唄にて拍子幕

宇治に遊ぶ記

笹川寿子（イカ）

「マア〳〵此の御茶の澤山有る事。　本當に逆上せて仕舞い升ね、能くも此樣に有ッたもれ」。

「さうですね、そして美事な樣で大抵叢でかこつて有り升事、之れはいづれ玉露か何かなんでしやう」。

「どうも皆好い木ですね」。

話しながら歩む五六人の一群、皆足のつかれて居る樣子、之も何所の人か？　其れは言はずとも……去月の十日妾共が宇治に遊びに行つた時の事です。　四方を見渡せば一面の茶畠「世の中に過ぐれて花と吉野山、紅葉と龍田茶は宇治の……」此歌も實に今日の事を思ひ出させる種となります。

時と午後六時余、妾共は只宿へ早く着き度いと云ふ念を持つて居る計り、然し宇治川は中々見ゑませんでした。　そうなると猶の事足とつかれて來ます。　道へと坐り度成ります。

「ア丶今日は本當に酷い目に逢つた事、妾は山科に車がわると許り思つて居たら一輌も無くつて其れから六地藏と言ふ所まで往くと必らず有ると言ふものだから樂みにして來たよ此頃は御茶で働きに往つて居ないつて……本當に〳〵弱つちまつた。」　此位なら稻荷迄往つた方が……」。

皆の者に獨り後れてつぶやくと同伴の人と早くも見付け、

「貴孃大層お弱りなすつたね、最う直きですから暫らく……」。

云つて向ふを見て、

「ソラ最う宇治橋が見ゑ出しましたよ、アレ御覽？」

「ナヤ何處に？」

遙か向を見渡せと夕陽と紅ゐの幕を張つて西山を朧に霞にして宇治川の清き流れは影を浮べニコ〳〵と小波を打たせて居ます。　嗚呼實に愛らしい美しい景色！　實に滑らかな流れ！

此の清流の上に吾れ占め顏に大きく成つて冷笑して居るものは？　これこそ先きから樂みにして居た宇治橋！　其嬉しい宇治橋が幽に向ふへ見えました。　此時に始めて吾に返つた心地、此の宇治の美しい景色も嬉しいが爲め一層壯快に見えました。

やがて一町余も來ました。　早や宇治橋は眼の前に成りました（諸々の家は皆火を燈して居ました）川岸の宿屋は客の來るを待ち妾の宇治橋へ來るのを待つて居ました。　橋の中央に立つて四方の景色をながむれば實に見れば見る程快よい此の景色、ちつと早や過ぎますが此樣所へ幾でも二ッ三ッ……

「早く御出なさい宿へ往くのがおそく成りますよ」。

「はい」。

答へては見たものゝ思ひ切れない此景色、それでもまさか此處に始終立つて居る譯にも往きません。　仕方なく〳〵──殘り惜しくも思ひ切ッて橋を渡り左へ折れ、とう〳〵菊屋と言ふ宿へ着しましよ。　時は最早や彼れ是れ八時頃でしよ。

此菊屋と言ふと萬碧樓と言ひます。　連れの人等の駄洒落を外に聞き流して夕餐を終へ縁側へ立ち立で見れば直ぐ眼の下と宇治川。　然し惜しい事には其夜は月が無かつた爲め、向側れ宿の燈火の寫る外と見る事を得ませんでした。　水の音は絶えずゴー〳〵として雨でも降つて居るかと疑はれてくたびれて居ながら直に眠りに付く事も出來ませんでした。

＊　＊　＊　＊　＊

明方を報らせる諸所の鳥の聲。　アラ嬉しや「今朝こそは思ふ樣景色を熟視仕樣」と云ひながら直に縁側へ出で前面れ山と見れば太陽の光まばゆく輝き今起きたよと言はぬばかりに山の上へさし登つて宇治川の水を鏡にし朝からの化粧三昧そんな事はどうでも宜しいが先づ此景色を六ヶ敷く言へば「樓下の長流滾々藍を流し朝日山（朝日山でしたら日出山でしたか、rい失念しました）影と倒にして中流に印し風色掬そべし」とでも……何しろ近頃に珍らしい好天氣でした。

八時頃宿を出て平等院に往きました。　扇の芝と云つて源頼政公が此の上で自殺しられたと言ふことです。

其次へ釣殿今は前に堤等が出來て居ますが昔しは其釣殿の前迄宇治川が在つたそうです。　其れ故頼政公が此處で釣を爲された其故と以て釣殿と名付けたとの事です。

此度ぞ鳳凰堂、之れは中々の建物日本第一と言ふ由です。が、全体の建方は丁度鳳凰が羽根を延ばした樣で尾は長い廊下に見立てゝ有ります。

本坊へ往つて寶物一覧しました。　其内での大略を述べましやう。

織田信長公寄附、應擧の畫の寫し。　名号の釜。　經藏大塔古瓦。　般若心經。　御家流蹟、平等院寳記、二品親王宮御筆。　明應九年の物、平等院勸進牒、三條實隆卿筆。　頼通氏に賜ふ者、後冷泉天皇勅額（寫に非ず）。　頼政軍旗、梵字、敵川覺阿法師筆。　足利義政將軍眞蹟。　帝釋天像、法橋定朝一刀三禮行。　平等院銘文。　宇治川戰に有名ある一來法師鞍。　仁平三年五月怪禽と紫宸殿上に射るもの頼政弓雷上動と号ぞ。　頼政馬鞍。　頼政旗竿、雜鞨產竹。　高倉宮念持佛。　如意輪觀世音古像。　頼政公像。

先づ妾の見る所では之れ位なものでした。　住持の言ぞれるには「此間まで張札が仕て有つたが鳳凰堂の廊下の壁に頼山陽の樂書が有る」と此事を聞いて妾共も歸りがけに探しました。　然し中々解りません。　澤山所々に細字が書いて有りますからどれが其れだか少しも分りません。　然し之れで有らうかと思ったけ少し高い所に書いて有ッた細字です。古い事故讀める事は出來ませんが其傍らに紙本の有つた跡が有りました。　多分それでしやう。

即ち宿へ歸り仕度を調へて伏見迄の車とと尋ねましる（此處より伏見まで十一里）矢張り此處にも有りません。　それ故舟を一艘雇つて宇治川を下りました。

車計りでも余り面白く有りません。　舟を浮べるのも中々興が有るものです。　普通の何でも無い川でさへそうです。それにまア宇治川を……猶更愉快でした。　然し宇治橋の漸々遠くなるに從つてなんだか殘り惜しくも有りましる。

アヲ最う橋も見えなくなりた。　先きから妾は醉つて舟の中に横になつて居ました。　暫らくして遙か向ふに觀月橋へ雅名觀月橋、俗名ぶくご橋と云ふ）が見えました。　其時の嬉しさ、宇治川を出た時は切角の景色も醉の爲に余り感服仕ませんでしたに、今ぞ漸く起き上りて邊りの景色も見る樣に成りました。　川邊にはそよ風がなびいて居る青柳の糸、堤上には植ゑ付けてある常磐の木、今は若葉も十分に緑を染上げ、妾共と送る爲か、五六本の茶の木が有まーた。（宇治の名物は第一茶、第二 糖、第三茶の木で作つた人形）。　兎角そる内に早や觀月橋も目の前にありました。　妾は生き返つた樣な心地ア、今思へば最う一度宇治の景色が見たくありました（實は余り景色を一心になりて視て居たものですから醉つるのに……それにマア人と云ふものは欲の深いもの最う一度見たいとも……）

上陸して（此所には澤山車が有ります）車を雇ひ十二時過ぐる頃稲荷へ着しました。　此處で暫らく休み稲荷神社へ参詣して其れより京都の方へ向け出發しましたは丁度五月十一日の午後でした。

附言　京都地方は諸君も御承知だらうと存じました故略しました。　御存じなくとも知れて居る所ですから……

又黄檗山も只支那風と云ふ丈けで建築が立派と云ふ許り別に寶物と云つて見ません故略しました。　建物は余程立派です。　宇治川で戰つた場所は未だ判然として居ませんと言ふ事です。

朝顔日記の事と聞きましる。　然しこれも今でも少しも知れぬと言ふ事でそ。

（をはり）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY